369 Ga-67 ECTによる肺癌縦隔転移の診断

仙田宏平，田内圭子，中条正雄，長谷川みち代
（国立名古屋　放）

胸部のGa-67 ECTを施行した肺癌患者について，X線CT所見と比較し，ECTによる縦隔転移の存在診断能を検討した。

対象は両CT検査が同時期に行ってある原発性肺癌36症例（内，腺癌12，類上皮癌12，小細胞癌6，大細胞癌1，その他5）と転移性肺癌6症例の計42例（45回検査）であった。ECTはGa-67-citrate 2~3mCi静注後48時間にGE社製MaxiCamera400A/Tで行った。X線CTは東芝製TCT60Aを用い，大多数例に造影を加えた。

両検査所見はほぼ同一スライス面の縦隔部について比較し，ECTでhot areaの，またX線CTで腫瘤または径1cm以上のリンパ節腫大像の有無を判定した。

両異常所見は旁および前気管領域で比較的よく一致したが，気管分岐部領域では不一致例が約半数に認められた。また，大動脈弓領域では半数の不一致例の大部分がXCTのみで陽性であった。この要因は，肺野と肺門についての同様の検討あるいは他検査結果からみて，原発巣の組織型，転移巣または腫大リンパ節の大きさ，放射線治療の有無と関係すると考えられた。

ECTは，従来のGa-67 シンチと比べ縦隔転移をより明瞭に描出したが，ある程度の限界が認められた。

370 肺癌－過去5年間のGa-67，肝および骨シンチグラフィのTNM病期分類からみた分析

伊藤　和夫、藤森　研司、中駄　邦博、塚本江利子
古舘　正従（北大、核医）
宮本　宏、川上　義和（北大、一内）

過去5年間(1980-1984)に施行したGa-67，肝および骨シンチグラフィ例で組織診および病期分類の確定した肺癌153例についてTNM病期分類からみた各シンチグラフィの診断的意味について検討した。

シンチグラフィ：1)Ga-67：2 mCi IV，48～72時間後全身正背面および胸部正背面を撮影。2)肝：Tc-99mスズコロイド 4 mCi IV，5方向400-500 cts にて撮影。3)骨：20 mCi IV、3-4 時間後全身正背面とスポット像撮影。

結果：

1)Ga陽性率は70%(109/153)，疑陽性例16例を除くと80%で、組織型ではSq(80%)>Sc(76%)>Ad(61)> Lc(58%)の順であったが統計的には有意差を認めなかった。

2)Gaで有意差が見られたのはT分類（腫瘍サイズ）と縦隔リンパ節(N2)で、肺門リンパ節(N0,N1)は有意差が示されなかった。

3)M1例67例(44%)中Ga20例(30%)、肝13例(19%)、骨22例(33%)で、これら3検査のいずれかが陽性であった症例は40(60%)であった。

371 原発性肺癌の^{201}Tl，^{67}Gaシンチグラムの臨床病理に関する研究

杠　英樹，森本雅己，大橋昌彦，中西文子*
（信州大　2外，放*）

^{201}Tl，^{67}Gaスキャンを施行し，治癒および準治癒手術を行なった30症例に対して^{201}Tl，^{67}Gaシンチ陽性例と組織型，リンパ節転移の有無，術後臨床病期，予後および血液対腫瘍比CPM/gの関係を検討した。

^{201}Tlシンチ陽性例は30例中18例，^{67}Gaシンチ陽性例は30例中15例であった。組織型別では^{201}Tlシンチ陽性18例中11例が腺癌，6例が扁平上皮癌，1例が大細胞癌であり，リンパ節転移は18例中11例に認めた。術後臨床病期では7例がI期，5例がII期，6例がIII期であった。術後2年以内の再発，死亡は18例中11例(61.1%)であった。^{67}Gaシンチ陽性15例中，組織別では9例が腺癌，5例が扁平上皮癌，1例が大細胞癌であった。リンパ節転移は15例中10例に認めた。術後臨床病期では15例がI期，6例がII期，4例がIII期であった。術後2年以内の再発，死亡は15例中9例(60%)であった。次に^{201}Tlおよび^{67}Gaシンチが共に陽性例は13例であり，術後2年以内の再発・死亡は13例中8例で，^{201}Tlおよび^{67}Gaシンチがともに陰性例は10例であり，術後2年以内の再発・死亡は10例中2例であった。以上より，肺癌のシンチの有用性を報告する。

372 原発性肺癌における^{201}Tl/^{67}Ga粗摂取率比（CUR）と予後(2)　－CURと生存率との関連－

星　宏治，戸川貴史*，加藤和夫*，樋口義典*，
鈴木　晃*，木村和衛　（福島医大　放，*核）

原発性肺癌53例において^{201}Tl／^{67}Ga粗摂取率比（CUR）を算出し，生存率（Kaplan-Meier法により算出）をstage，組織型およびCURを基に比較した。53例の18カ月生存率は，stage I・II（10例）90%，stage III（20例）48%，stage IV（23例）14%であった。この53例をCUR高値群（18例），中間群（18例），低値群（17例）に分類し18カ月生存率を求めるとそれぞれ76%，34%，9%であり，stageが進行する程，又，CURが低値である程生存率は不良であった。同一のstage，組織型においてもCUR＜1.0群とCUR≧1.0群との生存率を比較すると後者の生存率は前者に比し良好であった。さらに，53例中放射線・化学療法が行われたstage III（14例），stage IV（23例）計37例の18カ月生存率はそれぞれ19%，14%でありstage別に差がなかったが，この37例をCUR＜1.0群（30例），CUR≧1.0群（7例）に分類すると18カ月生存率はそれぞれ12%，50%であり，CURはstageに比し予後の良好な群を選別し得る可能性が示唆された。

Presented by Medical*Online